

W.G. アストンの口語文典初版における名詞と代名詞

吉田 朋彦

1 はじめに

ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston) は、幕末から明治にかけて、英国公使館と領事館で通訳官や書記官として活動する一方、日本語の文法書を著した。アストンの文法書には、口語のものと文語のものがあり、それらはこれまで、批判もあるが、一定の評価を受けている。吉田朋彦 (2007) では、その研究史について考察した。そこで本稿では、1869 年に出版された、アストンの *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language* (以下、「口語文典初版」と呼ぶ) において、名詞句がどのように記述されたかを検討する。名詞句の記述は、助詞と、人称代名詞と指示詞など代名詞の記述が大部分を占めている。助詞については主に、アストンがハとガの限定辞的な機能に注目していたこと、それが例文と一致しないこと、ホフマンの文典と同じ傾向の考え方をしているものの、ガの機能については対照的であることを示す。また、代名詞については、人称代名詞の記述では、2 人称代名詞に対人関係が考慮に入れられ、後の記述の萌芽となっていることを示す。指示詞については、コと *this*、ソ・アと *that* との対応はあるが、ソ系の「話し相手中心」という特徴は見られないこと、ア系の直示用法が明らかではないこと、指示詞の体系全体も明確にするまでに至っていないことを述べる。

2 口語文典初版について

口語文典初版は、序文によれば、日本に来る商人など口語学習者のために書かれたという。これは後の第 2 版と第 3 版でも変わらない。しかし、当時は日本語の研究が進んでいなかった時代であるから、そのように書かれていても日本語の文法の研究書としての性格もある。また、初版は、アストンの口語研究の集大成である第 4 版 *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (1888 年) と、文語研究の最後の版 *A Grammar of the Japanese Written Language* (1904 年) への第一段階である。筆者の関心の対象のひとつである指示詞の研究史では、アストンの考察全体が研究史上で最も早期のものであり、口語文典初版はさらにその出発点ということになる。

初版にある内容は比較的簡素である。口語文典第 4 版が 200 ページを越えるのに対し、序文なども含めても合計 40 ページである。内容の構成は全 14 章で、次ページに掲げられた目次にあるように、書記体系と音声から始まり、品詞を中心とした文法、金銭と度量衡の表現、初学者に向けた注意事項で終わる。

アストンの記述には、日本語についての伝統的な見方とヨーロッパの伝統文法、そして近代言語学の方法が見られる。その中には、現代の見解とは異なった見解や不足している点がある。

第1章	The Alphabet—Pronunciation	アルファベット—発音
第2章	Noun—Particle	名詞—助辞
第3章	Pronoun	代名詞
第4章	Numeral	数詞
第5章	Adjective	形容詞
第6章	Verb	動詞
第7章	Adverb	副詞
第8章	Preposition	前置詞
第9章	Conjunction	接続詞
第10章	Interjection	間投詞
第11章	Order of Words in Sentences	文中の語順
第12章	Division of Time	時の分割
第13章	Money, Weights and Measures	金銭と度量衡
第14章	Common Errors in Speaking Japanese	日本語を話すときによくある誤り

口語文典初版目次

例えば、綴りと音声に関する第1章では、日本語の音と音節は、基本的に、いろは歌の47音節と「ん」の48音節に現れているとする。そして、「にごり」によって清音が濁音と半濁音になり、結果として72音節になるという説明をしている。これは日本の伝統に従った説明である。その一方で、母音*i*と*u*の無声化や、*au*と*ou*、*oo*の長母音化に言及するなど、音声学的な記述もしている。欠落した点としては、いわゆる拗音と促音の説明がないことが挙げられる。¹

文法は、各品詞の記述によって構成される(第2章—第11章)。その内容は、現代の文法とはかなり異なっている。名詞の記述には「助辞 (particle)」の説明があり、ここでは多くの助詞が扱われている。また、現代で助動詞として扱われる語の多くは動詞の活用 (conjugation) の一部として述べられ、アストンの「助動詞 (auxiliary verb)」はアル・イル・オルに限られる。活用として扱われないレル・ラレル、セル・サセルは、それぞれ「受動動詞 (passive verb)」「使役動詞 (causative verb)」と呼ばれている。さらに、後述するように、「前置詞」という章と「関係代名詞」という節があり、これらは英語や西洋の諸言語の話者に向けて書かれたことを示している。

この初版については、渡邊修と杉本つとむによる考察がある。渡邊修(1975、1982、1984)は、故亀田次郎氏の所蔵本に基づいて、主に書誌的な面について述べた。杉本つとむ(1999)は、近代言語学による日本語の記述という観点から論じ、具体的な文法項目については、ハとガ、動詞、形容詞を扱った。杉本は、ハとガについて、初版と第2版、第4版の3つから、アストンの記述の変遷を追い、その特徴を述べた。初版におけるハとガについては、ハが定冠詞、ガが不定冠詞に対応する点を、ホフ

マン (J.J. Hoffmann) と宇田川玄随、さらに現代の説とも共通点があるとしている。本稿では、書誌学的な面は視野に入れないものとする。また、ハとガについては、主格の表示とハ・ガの冠詞的な機能について、ホフマンとの共通点と相違点を述べることにする。

以下、口語文典初版から、代名詞と指示詞を含め、名詞句について検討する。

3 名詞と助辞

3.1 アストンの方法—伝統文法的な観点—

口語文典初版では、第2章が名詞の記述である。この章は §4 から §7 の4つの節で構成されている。§4 は題名なしで、内容は西洋の文法から見た日本語の名詞の特徴、§5 は「接頭辞 (Prefixes)」、§6 は「接尾辞 (Affixes)²」、§7 は「複合名詞の諸例 (Examples of Compound Nouns)」である。この「接頭辞」と「接尾辞」は、「助辞 (particle)」と総称される。「接尾辞」は現代の接頭辞と接尾辞と、助詞 (正確には助詞の一部) を指す。§7 の複合名詞の記述には、前項と後項の品詞の組み合わせ³の列挙と、連濁の指摘があるだけである。第2章の大半は、実質的には助辞の記述、中でも「接尾辞」の記述で占められている。

アストンは、日本語の名詞の記述を、西洋の伝統文法の枠組みを基礎にして述べた。名詞の概略を述べた §4 では、数と性、格表示から始める。アストンは、日本語の名詞が、数、性、格を表わす屈折 (inflection) を持たないことを述べ、その機能が助辞によって担われるとしている。該当箇所は次の通りである (日本語訳は筆者による。以下同じ。)

In Japanese, nouns have no inflections to distinguish singular from plural, masculine from feminine or neuter, or one case from another, but they are preceded or followed by particles which serve these and other purposes. (p.6)

日本語では、名詞に、単数を複数と、男性を女性や中性と、格と格とを区別をする屈折はない。しかし、名詞は、これらやその他の働きをする助辞が前に置かれるか、あるいは、後ろに続けられるかである。

そして、§5 で接頭辞として扱われている語は、オとゴ (御)、オ (雄) とメ (雌) である。§6 の「接尾辞」は、現代の副助詞と格助詞の一部 (ハ、ガ、ノ、ニ、ヲ、デ、モ、カラ、ヨリ、マデ) と、いわゆる並立助詞と終助詞カ、並立助詞のト、さらに、接尾辞ラ (例「子供ら」) とガタ (「役人方」)、ドモ (「私ども」) である。

これは、英語の文法というより西洋の伝統文法の枠組みに従った記述方法である。アストンはハとガについて、主格かどうかを検討し、ノを所有格、ヲを目的格を表示するものとしている。英語では語の形態で格が表示されるのは、名詞の所有格と、代名詞の主格と所有格、目的格であるから、それ以外の伝統文法の格 (与格や奪格) に相当するニやカラなどは、前置詞の章で説明すればよいはずであ

る。しかし、実際には、名詞の章で扱われ、英語の前置詞が付されている。つまり、伝統文法の枠に、日本語と英語の両方を入れているのである。

このことは、第8章「前置詞」の内容からも妥当である。アストンは、「前置詞」は日本語では後置詞であり、頻度の高い「前置詞」は既に名詞の章で述べたとしている。該当箇所は次の通りである。

The Preposition should in Japanese be called the Postposition, as it always follows the noun. The most common prepositions have been already noticed in the chapter on the noun. (p.29)

日本語では、「前置詞」は、いつも名詞に続くので、「後置詞」と呼ばれるべきである。最もよく使われる前置詞は名詞についての章で既に記されている。

続けて、英語の前置詞は、日本語ではしばしば、異なる品詞によって表現されなければならないとし、例として、ノアイダニ (between)、ノソバニ (beside)、コエテ (over) の3つを挙げている。だが、前置詞の章があるならば、アストンは英語の前置詞に相当する助詞を、そこで記述することができたはずである。つまり、名詞の章では主格と所有格、目的格だけにとどめ、前置詞の章で助詞のいくつかについて述べるということである。しかし、実際には、助詞は名詞とともに扱われ、ここでは、格とは無関係の英語の前置詞に対応する表現のみ挙げられている。それゆえ、アストンの記述の枠組みとして、伝統文法があったと考えられる。

3.2 接頭辞

接頭辞については概略を述べるにとどめる。

オとゴについては、現代の文法書にある記述と大差ない。これらがいわゆる敬語の接辞であり、和語にはオが、漢語にはゴが用いられることを述べている。

オとメについては、性の区別を表わすとされている。これは、文法的な性か、自然性を表わす接尾辞かどちらかである。当該箇所は、前出の箇所と次の箇所である。

Gender is sometimes expressed by prefixing *o* for the masculine and *me* for the feminine. Ex. *o ushi*, a bull; *me ushi*, a cow. (p.6)

性は、男性にはオを、女性にはメを接頭辞として付すことによって表わされることがある。例 オウシ a bull、メウシ a cow。

前出の1-5行目からは、アストンは、フランス語やドイツ語の名詞に見られるような文法的性について述べているように見える。しかし、この12-14行目からは、生物学的な性別が、接頭辞によって表わされると取れる。それゆえ、オとメは、名詞に付随する文法的な性ではなくて、英語の '-ess' のような自然性を表わす接辞として捉えられていたと考えられる。

3.3 接尾辞

3.3.1 ハについて

次に、名詞と助詞の扱いについて検討する。前述の通り、助詞は「接尾辞」として扱われる。具体的には、格助詞ガ・ノ・ニ・ヲ・デ・カラ・ヨリ、いわゆる並立助詞と終助詞のカ、並立助詞のト、副助詞ハ・モ、である。以下、これらのうち、ハとガ、ヲ、カを中心に述べる。

ハとガの位置づけは、アストンの後の文典とも、現代のものとも異なる。ハとガには、限定辞 (determiner) の役割が認められている。

ハは「定冠詞の一種」とされた。該当箇所は次の通りである。

Wa is a sort of definite article. It has no exact equivalent in English. It is not the sign of the nominative case, as is commonly stated. Ex. *Tenki wa yoroshī ka?* is the weather good? *Kono sakana wa takai ka?* is this fish dear? (p.6)

ハは一種の定冠詞である。それに相当する語は英語にはない。よく言われるように主格のしるし、というわけでもない。例「天気はよろしいか」「この魚は高いか」

定冠詞と同等であることを示す例文は、「天気はよろしいか」のみである。もう一方の例文では *this* が用いられている。このことから、ハは定冠詞というより、定名詞句を表示する機能を持つことをアストンが意図していたと推察できる。

3.3.2 ガについて

ハと比べると、ガの意味と用法はかなり不鮮明である。アストンはガに不定冠詞の機能と所有格の機能を認めている。

Ga is sometimes an indefinite article. Ex. *Kane ga aru ka?* Is there any money? It is sometimes the sign of the possessive case. *Watakūshi ga fune* my boat, *dare ga katana* whose sword? (p.6)

ガは不定冠詞のこともある。例「金があるか?」所有格のしるしのこともある。「私が船」、「誰が刀?」

しかし、実際のところ、ガの意味と機能をうまく把握できないことを示唆する一文がある。

The exact meaning and application of *ga* are difficult to define. It has been called the sign of the nominative case, and this is so far true that it is never found with an objective, but as seen above, it may be the sign of the possessive. (p.6)

ガの正確な意味と用法は、定義するのが難しい。主格のしるしと呼ばれているが、これは、目

的語とともに見られることがないので、その限りでは正しい。しかし、上に見るように、所有格のしるしのこともある。

ここから次のことが考えられる。ガが主格を表わすという見解に対して、アストンは目的格を表わすことがないという理由から、控えめに賛成していると取れる。ところが、ガが所有格を表わす場合もあることから、ガが主格を表わすとする考えを疑問視した。つまり1つの助詞が2つの格を担うことは否定していたのである。そこで、一般化の方法を変えたように見える。すなわち、英語で所有格の名詞が限定辞としての機能を持つと同じように、日本語でもガが限定辞としての機能を持つとし、その下位分類として不定冠詞と所有格の機能があると考えられるのである。

しかし、ガが不定冠詞と所有格の機能を果たし、また、ハが定冠詞を表わすとなると、問題点も生じる。まず、主格がどのように表わされるのかという疑問が出てくる。この点については、明確な記述はない。アストンは、ホフマンと同じく(3.3.1を参照)、主格は助辞によっては表わされないと考えていた可能性がある。

また、ガが不定冠詞と所有格を表わすとするなら、不定名詞句と定名詞句が同じ語によって表わされるという不合理がある。

さらに、アストン自身が例文として挙げた日本語文とは整合してもいない。口語文典初版で用いられたガを含む例文を見ると、すべて不定冠詞か所有格相当の語として用いられているというわけではないのである。口語文典初版でガが用いられた例を他に探すと、次の9例がある。

このうち、不定名詞句に相当するのは、普通名詞とともに用いられた4例((1)－(4))と疑問代名詞を伴う1例((5))である。その他、定名詞句として訳されている例が1例((6))、人称代名詞とともに用いられているのが1例((7))、動詞から派生した名詞を含む例が2例((8)、(9))ある。(7)－(9)は、英語では冠詞とともに用いられない場合である。なお、下線はすべて引用者による。

〈不定名詞句に対応している例文〉

(1) この港に船がたくさんある。

Kono minato ni fune ga takusan aru

There are a great many ships in this harbour. (p.6)

(2) デンキチに用があると言うて来い。

Denkichi ni yō ga aruto iute koi.

Go and tell Denkichi I have something for him to do. (p.30)

(3) 金がありませぬから

kane ga arimasenū kara

because I have no money. (p.33)

(4) 公使がお決めなされましたとおり

kōshi ga o kime nasarimashita tōri

in the manner decided by the ministers. (p.26)

(5) 誰がそう言いました。

Dare ga sō iimashita
who said so? (p.10)

〈定名詞句に対応している例文〉

(6) 金があるとき、買いましょう

kane ga aru toki, kaimasyō
I intend to buy some when I have the money. (p.33)

〈人称代名詞の例文〉

(7) あなたが売りました蒸気船

anataga urimashita jokisen.
The steamer which you sold (p.11)

〈動詞から派生した名詞の例文〉

(8) 少し休むがよろしゅうござりませぬか

Sūkoshi yasumu ga yoroshū gozarimasenū ka
Had not you better rest a little? (p.19)

(9) 来るがよかった

kuru ga yok'atta
'it would have been better for him to have come,' or 'it was better for him to come.' (p.27)

これらの例文からわかるように、不定冠詞が用いられる例文が挙げられていないのは (1) - (6) にさえ、不定冠詞がない。不定名詞句に相当する (2) と (3) の something と no money があるだけである。逆に、定冠詞とともに主格で用いられる例も 2 例ある。

ハとガが格の表示以外の機能を持つと考え、この 2 つの助詞を文法的な格表示よりも名詞句の機能から述べたことは、現代の説と比べると、先駆的といえる。しかし、文典の中の例文を説明しきれていない説になってしまったように見受けられる。

最後に、ガが不定冠詞と所有格の機能を担う点と、主格を表わす助辞がない点について、ブラウンとホフマンとの共通点と相違点について述べておく。ハについては、アストンは、ブラウンやホフマンの考えとは異なる。S.R.Brown(1863:33) は、ハは語や句を後続する語句から切り離すという機能を持つものとし、主格とは考えていない。J.J.Hoffmann(1868:75,77) もやはり、ハは、ハを伴う語句を後続の部分から分離し、強調すると思った。この点、ハに定冠詞の機能があるとしたのは、アストンの独自の考えであろう。

ガについては、Brown(1863:33) は、ハと同じ機能を認めている。Hoffmann(1868:77) は、ハとガの両方に、主格の機能を認めていない。ガは属格を表わすとし、同時に、定冠詞としての機能を持つとし

た。この点では、ホフマンの説と同じ傾向を示すが、限定辞の機能について正反対の説を採っている。

3.3.3 助詞ヲと「前置詞」

ヲについて、アストンは目的格のしるしとし、「大工は台を作る (Daiku wa dai wo tsükuru, the carpenter makes a table)」(p.7)などの例を挙げている。

そして、日本語の目的格と英語の目的格の相違点として、日本語の「前置詞」が目的格(対格)を取らないこと、日本語の目的格は省略可能であることに注意を促す一文がある。

The objective case governed by a preposition does not take *wo*, and even before a verb it is often omitted. (p.7)

前置詞によって支配される目的格は、ヲを取らないし、動詞の前でさえ、しばしば省略される。

この「前置詞」とは、第8章で「日本語では後置詞と呼ばれるべきもので、他の品詞から作られることがしばしばある」(p.29)とされる。アストンによれば、最もよく使われる「前置詞」は、ノアイダニ (between)、ノソバニ (beside)、コエテ (over) である⁴。

前置詞の章は、英語の品詞という観点から日本語を見て、格を表示せず、かつ、複数の語からなる句を挙げるための章である。前置詞に対応するという点だけならば、助詞のニやデ、カラなどが前置詞の章にも入れられるはずである。しかし、これらが前置詞に分類されないで、ノアイダニなどが前置詞とされるのは、ラテン文法の影響か、あるいは、格表示の機能を欠いて文法化の程度が低いからであろう。いずれにしる、日本語の文法とは相容れない内容である。この第8章は第3版まではあったが、第4版になって削除されている。

3.3.4 助詞カとその他の助詞

接尾辞として扱われる助詞の中には、カがある。ここでは、疑問を表わす終助詞カといわゆる並立助詞のカが、区別されずに扱われている。その例文は「大きい舟か (*Oki fune ka*, is it a large ship?)」と「男か女か (*Otoko ka onna ka*, is it a male or a female?)」(下線は引用者)である。これらは名詞に直接接続して、疑問を表わす場合である。アストンは単に「カは疑問を表わす (*Ka asks a question.*)」(p.7)とだけ述べている。疑問文の説明には、例文がこの断片的な2例しかないので、アストンが日本語の疑問文をどのように捉えていたかはわからない。

このような扱いの理由としては、やはり伝統文法の影響が考えられる。ラテン文法では、命令文が命令法として扱われる。アストンが日本語の命令文を扱うときにも、同じように「命令法 (Imperative)」として、否定文などとともに、動詞の章で扱っている。そして、ラテン語では、疑問詞のない疑問文は小辞 *ne* などによって作られ、名詞に直接も接続することができる⁵。そこからの類推が働いたのではないだろうか。

カの扱いの理由とは別に、助詞ガと同じく、文中の例文をよく説明できていない記述である。第2章のあとには、カが名詞に接続しない例が散見される。例えば「長崎に本屋あるか (*Nagasaki ni honya aruka*, are there any bookshops in Nagasaki?)」(p.22)、「波止場に通い舟があるか (*hatoba ni kayoibune ga arō ka*, do you think there are any ferry-boats at the jetty?)」(p.22)、「見られましたか (*Miraremashitaka*, could you see?)」(p.24) などである。

ハ、ガ、ヲ、カのほか、第2章で扱われている助詞は、ノ (of)、ニ (to, in, at)、デ (with, by, by means of)、ト (and)、モ (also, too, both)、カラ (from)、ヨリ (from)、マデ (to, until) である (括弧内はアストンが付した英語)。ノについて「所有格のしるし」という説明が付けられているほかは、どれも括弧内の語と例文を付けているのみである。

4 代名詞

4.1 人称代名詞

第3章は代名詞について述べた章で、その中では人称代名詞 (personal pronouns)、指示代名詞 (demonstrative pronouns)、疑問代名詞 (interrogative pronouns)、不定代名詞 (indefinite pronouns)、関係代名詞 (relative pronouns) という節が立てられている。

人称代名詞については、すべてに共通する説明と、各範疇に属する語の用法の記述とがある。このうち、2人称代名詞の記述には、対人関係について言及されており、その後のより詳細な記述の萌芽が見られる。

まず、アストンの説明によれば、人称代名詞の一般的な性質は3つある。それは、人称代名詞の品詞と、人称代名詞の数と性、人称代名詞の使用の制限である (pp.8-9)。

品詞については、人称代名詞は名詞と変わらないとされている。アストンは、人称代名詞を、意味ではなく文法的な観点、すなわち、助詞の接続が根拠に名詞と判断した。該当箇所を次に示す。

The words used as personal pronouns are really nouns, and may affix the particles given in §6. Ex. *Watakūshi no kanjō*, my account; *watakūshi ni kudasare*, please give (to) me; *anata mo o ide nasare*, do you come too; *omae to are*, you and he; *anohito no bōshi*, his cap. (pp.8-9)

人称代名詞として用いられる語は実は名詞であり、§6で挙げられた接辞を後ろに付けることができる。例「わたくしの勘定」「わたくしにください」「あなたもおいでなされ」「おまえとあれ」「あのひとの帽子」。

そして、2人称には「だんな(さま)」などの名詞が含まれている。ただし、どのような語が代名詞と同等であるかや、すべての名詞が代名詞と同じように機能するかなどの検討はない。

人称代名詞の数と性については、同じ形が単数と複数、男性と女性、中性に用いられるとしている (p.9)。ただし、人称代名詞については、使用頻度は低いものの、ワタクシドモ、アナタガタ、オマエ

ガタ、アレラという複数形もあるという。該当箇所を示す。

The same form is used for both singular and plural, and for masculine, feminine, and neuter. The plural forms *watakūshidomo*, *anatagata*, *omaegata*, *arera*, are comparatively little used. (p.9)

「同じ形が単数と複数の両方に、また男性と女性、中性に用いられる。複数形「わたくしども」「あなたがた」「おまえがた」「あれら」は、比較すると、あまり用いられない。

第3の点は、人称代名詞の使用の制限である。これは、日本語では人称代名詞が必ずしもすべての文(発話)で現れるわけではないということである。この点についてアストンは、かなり注意を要すると考えた節が見られる。というのは、代名詞の説明である第3章だけでなく、第14章 Common Errors in Speaking Japanese でも、簡単ではあるが、同趣旨のことが記載されている。そして、口語文典第4版においても、第4章16節(Aston 1888:15-16)をその説明にあて、「日本人は概して、第12章で記述されたような、人称を尊敬か謙讓の表現法によって示されることを好む。(Japanese generally prefer to indicate person by some of the honorific or humble modes of expression described in Chap.XII.)」「人称代名詞の濫用は、ヨーロッパ人が日本語を話すときにおかず非常によくある誤りであり、今までに出版された会話の手引きの価値を損ないさえする。(The indiscriminate use of pronouns is a very common fault committed by Europeans in speaking Japanese, and even disfigures some manuals of conversation which have been published.)」と言うほどである。

この人称代名詞が使われる場合とそうでない場合について、アストンは曖昧さの有無と強調の有無の点から述べている。例えば、「明日、江戸へ参ります (Miōnichi Yedo e mairimasū) (p.9) では主語のワタクシは省略される。これに対して、英文で 'I don't know what you may do, but I shall go to Yedo tomorrow.' の意を表わすとき、すなわち主語が強調されるとき、人称代名詞は省略できないとしている。

それぞれの人称については、まず、1人称代名詞は「わたくし」と「わたし」「わし」「おれ」が挙げられている。これら4語の間の差は使用頻度の差「わたくし」が最も普通で、他はそれほどでもないとされている(p.8)とされるに止まり、対人関係的な要素は考慮されていない。第4版では、この4語のほか、「おれ」「僕」「てまえ」「おいら」「自分」など11語が挙げられ、話し手と相手の社会的グループやいわゆる敬意の差が述べられているのと大きな差がある。

2人称代名詞の記述には、後の記述の萌芽が見られる。掲げられた語は、「あなた」「おまえ」「おまえさん」「きさま」「きみ」「先生」「だんな」「だんなさま」の8語である。これらについて、話し相手の社会的地位、語の持つ親しみの程度が言及されている。例えば、「あなた」であれば、話し手より上位か同等の者、あるいは、「当然の礼節 (ordinary civility)」をもって話しかけられるべき相手に対して用いられるとされている。また、「おまえ」は、親しみがあるが見下すような語で、従者 (servant) や職人、家族などに用いられるとしている。さらに、話し手の集団についても注目され、「おまえさん」が主に女性によって、「きみ」が兵士や学生の間で用いられるとされている。このように、話し手と相手、その対人関係的な要素が簡潔であるが記述されている。

3人称代名詞は、「あれ」と「あのひと」が挙げられているだけである。アストンはこの時点ではア

レを主たる3人称代名詞として考えていたようで、「3人称の代名詞は、アレで、ときにはアノヒト、文字通りには *that man* のこともある。(The pronoun of the third person is *are*, and sometimes *ano hito*, lit. *that man*.)」(p.8)と述べている。

4.2 指示詞

4.2.1 「指示代名詞」の文法と意味

現代の「指示詞」は、「指示代名詞」(pp.9-10)と第7章「副詞」(pp.27-29)の2カ所で扱われている。これは、口語文典第4版で提示された包括的な一覧表と比較すると、一部に過ぎない。扱われた語のうち、指示代名詞は、コノ・コレ、ソノ・ソレ、アノ・アレ、副詞は、ココ・ココニ、ソコ・ソコニ、アスコ・アスコニ、ドコ・ドコニ、コチ・コチラ、ソチ・ソチラ、アチ・アチラ、ドチ・ドチラ(以上、場所の副詞)、コウ・ソウ・ドウ・カヨウニ(様態の副詞)、ドノグライ(量の副詞)である。様態の副詞にアアはない。アアは第4版の指示代名詞の一覧表で初めて掲載される。

アストンは文法と意味の両方を記述した。文法的な観点からは指示代名詞の品詞分類である。意味的な観点とは、コ系・ソ系・ア系の違いである。ただし、直示用法と照応用法の区別はない。コ系とソ系は直示用法、ア系は照応用法をもとに考えていたようである。

品詞分類については、アストンは、人称代名詞と同じく、他の品詞と区別するだけの特徴があることには否定的である。コノ・ソノ・アノと、コレ・ソレ・アレをともに「指示代名詞」としているものの、実質的にはコレとソレ、アレは名詞、コノとソノは形容詞と考えている。

これを示すのは、「コレは単独で用いられる (*Kore stands alone.*)」(p.9)、「コノは名詞の前で用いられる (*Kono is used before nouns.*)」(p.9)、「コノは実際は形容詞、コレは名詞である (*Kono is practically an adjective, and kore a noun.*)」(p.9)、「ソノとソレの間には、コノとコレの間にあるのと同じ区別がある (*There is the same distinction between sono and sore that there is between kono and kore.*)」(p.9)、「3人称代名詞に用いられるのと同じ語 (*Are is the same word which is used for the personal pronoun of the third person.*)」(p.9-10)、「コレ、ソレ、アレは、実際には、名詞であり、名詞と同じ規則に従う。(*Kore, sore, and are, are really nouns, and follow the same rule as nouns.*)」(p.10)である。アノについては何も記されていない。アノは人称代名詞の所有格のはずであるが、この点について言及はない。

このように、「指示代名詞」を構成する語の実質的な品詞が考えられたというのは、すなわち、アストンが代名詞について伝統的な分類から日本語固有の品詞分類を探っていたことに他ならない。指示代名詞のみならず、前述したように人称代名詞も名詞とされ、また、後述する疑問代名詞と不定代名詞も同じく名詞とされることを考えると、アストンは伝統的な分類すなわち「人称代名詞」「指示代名詞」「疑問代名詞」「不定代名詞」から出発して、日本語に固有の、あるいは、最低限必要な品詞分類を探る方向に向かっていただけと見ることができる。もちろん、コノなどを典型的な形容詞と同一視してよいかどうかなど、現代の文法に照らして疑問な点はある。しかし、それでも日本語独自の品詞分類への試みがなされたと認めてよいのではないか。

次に、指示代名詞の意味については、コ・ソ・アそれぞれについて英訳があり、ソとアの区別が記

されている。まず、コノ・コレについては、意味の確たる記述がない。日英語の例「この木 (*kono ki, this tree*)」「これは鉄砲でござります (*kore wa teppō de gozarimasū, this is a gun.*)」によってコノとコレが *this* に相当することが示されているだけである。指示対象の位置が話し手中心に分布するという観察は明示されていない。

ソノとソレは、やはり日本語と英語の文を並べて、*that* に相当するとしている。例は「どこでその鞍を買いましたか。 (*Doko de sono kura wo kaimashitaka, where did you buy that saddle?*)」「それは気の毒なことでござります。 (*Sore wa kinodokuna koto de gozarimasū, that is a sad thing.*)」 (p.9) である。

アノとアレも同じく *that* に相当する。そして、ソレ・ソノとアレ・アノの違いは、指示対象が会話の場面に現実存在するかしないかである。該当箇所を下に示す。

Ano, are, that, are only used of persons or things not actually present, and are opposed to some⁶ [sic] and sore, which refer to something present before the speaker. (p.9)

アノ、アレ、すなわち *that* は、その場実際に存在しない人や事物についてのみ用いられ、ソノとソレと対立する。ソレとソレは話し手の前に存在する何らかの事物を指す語である。

例として「あの大工は来たか (*Ano daiku wa kitaka, has that carpenter come?*)」が挙げられている。現代語では、この「あの大工」は、話し手が見ている大工を指すのではなく、談話の中で出てきて、話し手が知っている大工を指すことがほとんどであろう。上記の引用箇所からも、直示用法ではなく、照応用法のアノと考えられる。

このように、口語文典初版の段階では、コ系、ソ系、ア系の違いはまだ明確ではない。コ系とソ系・ア系の差は、*this* と *that* の差として把握されていた。それゆえ、コ系とソ・ア系という明確な線引きがなされていたことは確かである。

しかし、各々の語の意味の違いがどの程度理解されていたかは疑問である。コ系の意味は *this* と *that* から理解されていたはずである。しかし、「話し手中心」という特徴は、理解されていたとは想像されるけれども、少なくとも明示はされていない。ソ系は *that* とされ、ア系との対比によって、話者の眼前のものを指すとされ、「話し相手中心」という特徴は認められていない。それゆえ、コ系の特徴がソ系の特徴を前提とした上での話者中心性が把握されていた可能性は低いのである。ア系は、ソ系と会話の現場にあるかどうかで対立しているので、直示用法が理解されていない。

それゆえ、指示詞の体系も当然、不明確なものになる。コ系とソ系は、話し手の近傍とそれ以外として対立するが、ソ系がア系と会話の現場に指示対象があるかどうかで対立するので、コ系とア系に共通項はなく、そのゆえに、コ系とア系の連関がないのである。可能性としては、コ系とソ系のペアが、ア系と対立するという図式が考えられるが、アストンがそれを考えていたことを示す手がかりはない。

4.2.2 副詞の中の指示詞

次に、副詞として分類された指示詞を見ることにする。副詞について述べた第12章には、指示代名詞と副詞の関係についての記述はない。副詞の性質として挙げられたのは3点で、いわゆる形容詞連用形「…ク」が副詞の機能を持つこと、副詞の多くがサキニのように名詞と「前置詞」から成ること、スベテやノコラズのような動詞の分詞形もあること、である。そして、副詞の下位分類として、時の副詞、場所の副詞、様態の副詞、量の副詞、肯定と否定の副詞があり、それぞれで日本語と対応する英語が記されている。

指示詞は場所の副詞と様態の副詞、量の副詞に見られる。指示詞とそれに関する語句を取り出すと次のとおりである (pp.28-29)。アアは様態の副詞とされていてよいはずだが、先に述べたとおり記載がない。

〈場所の副詞〉

ココ (here)、ココニ (here)、ドコ (where)、ドコニ (where)、ソコ (there)、ソコニ (there)、アスコ (there)、アスコニ (there)、コチ (hither)、コチラ (hither)、ドチ (whither)、ドチラ (whither)、ソチ (thither)、ソチラ (thither)、アチ (thither)、アチラ (thither)

〈様態の副詞〉

ドウ (how)、コウ (in this way)、カヨウニ (in this way)、ソウ (in that way)、サヨウニ (in that way)

〈量の副詞〉

ドノグライ (how much)

4.2.3 口語文典初版におけるアストンと佐久間鼎

最後に、佐久間鼎との比較について触れておく。上で見たように、口語文典初版の「指示代名詞」には、口語文典第4版における「指示代名詞」や、佐久間鼎の「指示詞」の概念は存在しない。口語文典第4版と佐久間の説は、コソアドを語形と意味の共通性に基づいて括り出した点が共通している。しかし、口語文典初版では、まだソ系とア系が正しく位置づけられてないし、語形の共通性についても記述がない。

また、指示代名詞の品詞に対する考えも佐久間とは対照的である。アストンは、代名詞という範疇に属する語が、文法的にはどのような品詞なのかを考え、名詞や形容詞などのより一般的な性質を持つ品詞に帰属させようとしている。この点は、口語文典第4版の指示詞の一覧表に名詞などの品詞が記載されていることから、後の版でも継承された考え方である。これに対して、佐久間は『現代日本語の表現と語法』に見られるように、さまざまな品詞に散らばっていたコソアドを1つの品詞として

〈疑問代名詞ナニ〉

なんだ

Nanda

what is it? what is the matter? what do you want?

その軍監は何と言う

Sono gunkan wa nani to iu

what is that man-of-war called?

何しに来た。

Nani shi ni kita

what have you come to do? what has brought you here?

何！すぐに馬をひいて来い

Nani! suguni mūma wo hīte koi

what(nonsense)! lead the horse here at once.

〈不定代名詞ダレ〉

誰か下に待っておる

Dare ka shīta ni matte oru

somebody is waiting below.

誰も知らぬ

Dare mo shiranū

nobody knows.

誰でもよろしゅうござります

Dare de mo yoroshū gozarimasū

any body whatever is good. i.e. any body whatever will do.

〈不定代名詞ナニ〉

この袋の中に何か入っているか

Kono fukuro no naka ni nani ka haitte iru ka

is there anything in this box?

乞食に何かをやりなされ
Kojiki ni nani ka o yari nasare
give something to the beggar.

何もござりませぬ
Nani mo gorzarimasenū
there is nothing at all.

関係代名詞についても、英語をもとにした記述が見られる。日本語に関係代名詞がなく、英語の関係詞節と同じことを表わすためには、関係詞節内部の動詞を被修飾名詞の前に置けばよいとされている。つまり、the man who was murdered と the murdered man の関係が、英語と日本語の関係詞節の関係に相当するとされている。英語とは異なる関係詞節、すなわち関係詞節内部の要素でない語句が被修飾名詞になる関係詞節については、何も述べられていない。以下、原著 11 ページの例を示す。

The steamer which you sold
anataga urimashita jokisen
あなたが売りました蒸気船

The sailing vessel which you bought yesterday
sakujitsū katta hobune
昨日買った帆船

A ship which sails fast, or a fast sailing ship
hayaku susumu fune
早く進む船

A man who does not understand Japanese
Nihon go wakaranū hito.
日本語わからぬ人

5 終わりに

本稿ではアストンの口語文典初版について、名詞句がどのように扱われているかを検討した。アストンは、概ね、西洋の伝統文法の枠組みから記述していた。名詞についても、数と性、格を表示する屈折についての記述から始めた。また、助詞の扱いを見ると、英語の代名詞で語形が変化する主格、対格、属格だけでなく、与格や奪格に相当する機能を持つ助詞も名詞の記述の中に入れられ、前

置詞としては扱われていなかった。

助詞の記述では、ハとガ、カの扱いに特徴が見られる。ハは定冠詞、ガは不定冠詞と所有格を表わすとされた。ここから、主格を表わす語がないことになる。この点については、ブラウンとホフマンの文典におけるハとガと共通する点がある。しかし、ホフマンはガに、所有格のほか、定冠詞の機能を認める点で、アストンと異なっている。また、問題点としては、ガが不定名詞句と所有格による定名詞句とともに表わすということ、本文中の他の章の例文と合致していないことが示された。

力については、並立助詞の力と疑問を表わす終助詞の力が区別されていなかった。力が文全体に対して働くのではなく、接続した名詞にのみ働きかける例だけで、日本語の疑問文の全体像が表わされているとは言い難い記述である。

人称代名詞については、一般的性質として、品詞は名詞であること、数と性の区別をほとんど持たないこと、使用が西洋諸語に比べて限定されることが述べられていた。そして各人称の記述では、2人称に話し手と相手の対人関係と社会的集団の違いが取り入れられている点が特徴的で、後の口語文典第4版の基礎になったものと思われる。

指示詞については、コノ・コレ・ココ・コチ・コチラ・コウに代表される6種類の指示詞が挙げられている(アアは欠けている)。コノとコレの類は「指示詞」として扱われたが、品詞はそれぞれ形容詞と名詞とされた。それ以外の4種類の語は、副詞として挙げられた。コ系に *this*、ソ系とア系に *that* があてられた。記述では直示用法と照応用法が区別されず、コ系の「話し手中心」とソ系の「話し相手中心」の特徴も見られない。ソ系とア系は指示対象が話し手の目の前にあるかどうかの違いとされたために、ア系の直示用法は正しく把握されていなかった。コ系・ソ系・ア系の体系は、コ系とソ系の対立と、ソ系とア系の対立の2つから成っている。しかし、コ系とア系の関係は不明である。場所の副詞は、英訳が示されただけで、意味は示されていない。

疑問代名詞(ダレ、ドレ、ドノ、ナニ)と不定代名詞(ダレ、ナニ)は、英語との対照で述べられた。その相互の関係は、「疑問代名詞(ダレ、ナニ)+カ、モ、デモ」が不定代名詞に相当するとされていた。ドノを除けばみな名詞とされたが、疑問代名詞と不定代名詞の例文は、名詞の屈折に従って列挙されたのではなく、英語との対照が明確になるような例文が選ばれている。

関係代名詞は日本語にないことが記され、英語の関係詞節(被修飾名詞を後ろから修飾)と名詞修飾の過去分詞(被修飾名詞を前から修飾)によって、英語の関係詞節と日本語の関係詞節の違いが示されていた。

【注】

- ¹ ただし、第1章の末尾に、長母音と短母音、単子音と二重子音 (double consonants) の区別に注意をしなければならぬと注意書きをしてある。この「二重子音」が拗音と促音に相当する可能性はある。例えば「かしゃ (貨車)」と「きゃしゃ (華奢)」、「くう (空)」と「きゅう (弓など)」などは、半子音jの有無で区別される。また、アストンは、「きった (切った)」の促音を長子音と解釈し、「きた (来た)」の「た」のような、単子音と区別するのに注意が必要と考えた可能性はある。
- ² ‘affix’ は現代では「接辞」とされることが多い。しかし、アストンは ‘suffix’ に対して ‘affix’ を用いているので、ここでは「接尾辞」とする。
- ³ 「名詞+名詞」(例「風車」)、「形容詞の語根+名詞」(「あかがね (銅)」)、「名詞+動詞の語根」(「物知り」)、「動詞の語根+名詞」(「乗り物」)である (pp.7-8)。
- ⁴ 「越えて」は「を越えて」の誤りか。
- ⁵ ラテン語の文法については、中山恒夫(2007)を参考にした。アストンがこれを日本語にも適用して、助詞カを名詞の扱いの中に入れたとみることもできる。
- ⁶ 原文には sone とあるが、sono の誤植であろう。

【参考文献】

- 杉本つとむ (1999) 『西洋人の日本語研究』 杉本つとむ著作選集 10 八坂書房
- 中山恒夫 (2007) 『古典ラテン語文典』 白水社
- 吉田朋彦 (2007) 「W.G. アストンの日本語研究—文典の研究の意義と先行研究の検討—」
『城西国際大学大学院紀要』 第 10 号 pp.35-54
- 渡邊修 (1975) 「アストンの日本口語文典初版；その書誌」『大妻女子大学文学部紀要』 第 7 号 大妻女子大学 pp.101-114
- (1982) 「アストン「日本口語文典」—初版影印」『大妻女子大学文学部紀要』 第 14 号 大妻女子大学 pp.39-63
- (1984) 「アストン日本語口語文典 (3 本対校) その一」『大妻女子大学文学部紀要』 第 16 号 大妻女子大学 pp.1-30
- Aston, William George (1869) *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*. F. Walsh, Nagasaki.
- (1888) *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. Fourth Edition. Lane, Crawford Co., Publishers, Kelly Walsh, Limited, Yokohama. The Hakubunsha, Tokyo. Trubner Co., Ludgate Hill London. Reprinted in 1997. In: *Collected Works of William George Aston Volume 2*. Ganesha Publishing Ltd. and Oxford University Press Japan
- Brown, S.R. (1863) *Colloquial Japanese, or conversational sentences and dialogues in Japanese, together with an English-Japanese index, and an introduction on the grammatical structure of the language*. Presbyterian Mission Press, Shanghai. 復刻本 1970 年 北辰
- Hoffmann, J.J. (1868) *A Japanese Grammar*. A.W.Sythoff, Leiden.

On Nouns and Pronouns in W.G.Aston's First Edition of *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*

Yoshida, Tomohiko

Abstract

This paper shows how William George Aston described nouns and pronouns in his first grammar book, *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*, published in 1868. His description of 'noun' explicates not only nouns but also prefixes, suffixes, and, particles like *wa* and *ga*. Pronoun' includes personal pronouns, demonstratives, interrogatives, indefinite pronouns and relative pronouns. Generally speaking, Aston used Western traditional grammar and English grammar as a starting point. However, at the same time, he made effort to find the system particular to the Japanese language.

Aston recognized some particles like *o*, *ni* and *kara* as the case system in the Japanese language. However, he did not think *wa* and *ga* marked the nominative case. This is similar to the thinking of J.J. Hoffmann and S.R. Brown. However, in contrast to them, Aston described *wa* as the definite article and *ga* as the marker of the genitive case and the indefinite article. Although these ideas are not accepted today, they show his originality.

His descriptions of pronouns were not as acute as those in his later publications. He did not understand the pronouns of the first person correctly, but was correct in understanding the ranks of the speaker and the addressee on the use of the pronouns of the second person. On the demonstratives, his descriptions remained naïve. They are mainly composed of the contrast of the Japanese demonstratives with the English ones, though he tried to find the difference between *so* and *a*, both of which were translated into 'that'.

Aston described the interrogative pronouns, the indefinite pronouns and the relative pronouns from the contrastive viewpoint of the English language and the Japanese language. He showed that the interrogative pronouns were used as the indefinite pronouns when they were followed by particles *ka*, *mo* and *demo*. He described the usages of indefinite pronouns in contrast with English 'some-', 'any-' and 'nothing'. On the relative pronouns, Aston pointed out that the Japanese language does not have them, and explained the position and the way of modification using the English past participle in the phrase 'the murdered man'.